

平成29年度外部評価結果を受けた改善の取組状況

<p>大学評価基準 (平成26年度)</p>	<p>(学士課程) 5-2 教育課程を展開するにふさわしい授業形態，学習指導法等が整備されていること。 【基本的な観点】 5-2-② 単位の実質化への配慮がなされているか。</p>
<p>学長が 取組が必要と 判断した課題</p>	<p>単位の実質化について，「(学生生活実態調査の結果から)学生の授業時間以外の学修は，時間的には確かに増加しているが，問題はその中身であり，その内容を把握し，学修の質的向上につながるような手立てを講じるべきである」という意見を受けたことから，この意見を反映した改善の取組が求められる。</p>
<p>改善策</p>	<p>「学生の授業時間以外の学修の質的向上」については，シラバスの項目「授業時間外の課題等」に効果的な学修につながる内容を明確に記載するように「シラバス作成要領」を改正し，教員に十分に説明するとともに，授業において周知徹底を図ることで改善する。</p>
<p>改善策の 取組状況</p>	<p>(1) 平成30年度の改善状況  <input checked="" type="checkbox"/> 対応(反映)完了  <input type="checkbox"/> 次年度も引き続き対応</p> <p>(2) 平成30年度取組内容・結果          学生の授業時間以外の学修の質的向上を図るため，シラバスの「授業時間外の課題等」欄に効果的な学修につながる内容(予習内容やレポート課題，課題学習時間等)を明確に記載するようにシラバス作成要領を改正した。          教員へはシラバス作成依頼時に「授業時間外の課題等」欄に記入する旨を周知徹底し，学生へは授業初回等において内容を周知した。</p> <p>(3) 今後の取組(予定)          (該当なし)</p>

<p>大学評価基準 (平成26年度)</p>	<p>(学士課程) 5-3 学位授与方針(ディプロマ・ポリシー)が明確に定められ、それに照らして成績評価や単位認定、卒業認定が適切に実施され、有効なものになっていること。 【基本的な観点】 5-3-② 成績評価基準が組織として策定され、学生に周知されており、その基準に従って、成績評価、単位認定が適切に実施されているか。</p> <hr/> <p>(学士課程) 5-3 学位授与方針(ディプロマ・ポリシー)が明確に定められ、それに照らして、成績評価や単位認定、卒業認定が適切に実施され、有効なものになっていること。 (大学院課程) 5-6 学位授与方針が明確に定められ、それに照らして、成績評価や単位認定、修了認定が適切に実施され、有効なものになっていること。 【基本的な観点】 5-3-③ 成績評価等の客観性、厳格性を担保するための組織的な措置が講じられているか。 5-6-③ 成績評価等の客観性、厳格性を担保するための組織的な措置が講じられているか。</p>
<p>学長が 取組が必要と 判断した課題</p>	<p>成績評価、単位認定の実施について、「シラバスの自己点検の結果報告書の報告状況が回答率73.5%は不十分であり、100%にまで上げるべきである」、「上越教育大学スタンダード」と「各授業科目ごとの到達目標」との関連づけがはっきりしていない。各授業科目の到達目標(をスタンダードと関連づける説明)が弱い、「形成的評価」(事中評価)は重要な視点と考えられるので、成績評価が総括的評価(事後評価)に終始することなく、形成的評価のメリット・重要性を理解し、積極的に導入を図り、パイオニア的な役割を果たすよう提言したい、「成績評価の客観的・厳格な基準を策定するだけでなく、これが実質的に作動されるような手立ても明確化する必要がある」という意見を受けたことから、これらの意見を反映した改善の取組が求められる。</p>
<p>改善策</p>	<p>① 「シラバスの自己点検の結果報告書の報告状況の回答率向上」については、教務委員会において周知徹底を図り、100%の達成に向けて改善する。</p> <p>② 「上越教育大学スタンダードと各授業科目ごとの到達目標と関連づけ等」については、シラバスに項目「スタンダード」を設定し、授業科目との関連づけを明確にして周知徹底を図ることで改善する。</p> <p>③ 「形成的評価(事中評価)や成績評価が実質的に作動されるような手立て等」については、教務委員会等においてシラバスと成績評価基準の関連づけを整備し、その関連づけを明確にするとともに、周知徹底を図ることで改善する。</p>
<p>改善策の 取組状況</p>	<p>(1) 平成30年度の改善状況</p> <p>① □ 対応(反映)完了 ■ 次年度も引き続き対応</p> <p>② ■ 対応(反映)完了</p>

	<p><input type="checkbox"/> 次年度も引き続き対応</p> <p>③</p> <p>■ 対応（反映）完了</p> <p><input type="checkbox"/> 次年度も引き続き対応</p> <p><b>（２）平成３０年度 of 取組内容・結果</b></p> <p>① シラバスの自己点検については、教務委員会で依頼するとともに、全教員にメール通知により周知徹底した。本年度は、特に、課程認定申請時に文部科学省から指摘のあった箇所について留意する旨を付記し、提出を促した。</p> <p>提出率は徐々に上昇している（H28：73.5%，H29：75.5%，H30：78.9%）が、引き続き100%の達成に向けて改善を図る。</p> <p>② 上越教育大学スタンダードを改正したほか、シラバスの項目「上越教育大学スタンダード到達目標」において、授業科目ごとに項目を設定することで、到達目標と関連づけた。</p> <p>また、教務委員会やシラバス作成時に教員へ周知徹底した。</p> <p>③ 学部及び大学院履修規程の「成績の評価」を改正し、シラバスにある到達目標等への達成水準を成績評価基準として明確にするとともに、教務委員会で周知徹底した。</p> <p><b>（３）今後の取組（予定）</b></p> <p>① 次年度以降は教授会等においても教員に周知する。</p>
--	--

<p>教職大学院評価基準 (平成27年度)</p>	<p>基準3-1 教職大学院の制度並びに各教職大学院の目的に照らして、理論的教育と実践的教育の融合に留意した体系的な教育課程が編成されていること。</p>
<p>学長が 取組が必要と 判断した課題</p>	<p>教職大学院における体系的な教育課程について、「『理論の実践化』と『実践の理論化』があるうち、『理論の実践化』は比較的容易であるが、『実践の理論化』はどのように行われるのか」、「カリキュラムツリーでカリキュラムの体系を明示したことはよいとして、各科目等との相互関係・体系のみでなく、より具体的な内容の体系モデルをも表示する必要があるように思われる」という意見を受けたことから、これらの意見を反映した改善の取組が求められる。</p>
<p>改善策</p>	<p>① 「『実践の理論化』はどのように行われるのか」については、大学改革推進委員会及び教育研究評議会で定めた「上越教育大学大学改革基本構想」に基づき、教職大学院においてもカリキュラムやプログラムの整備を通じて改善する。</p> <p>② 「より具体的な内容の体系モデルをも表示する」については、教職大学院の案内や「履修の手引き」等の内容を整備することで改善する。</p>
<p>改善策の 取組状況</p>	<p>(1) 平成30年度の改善状況</p> <p>①</p> <ul style="list-style-type: none"> <li><input checked="" type="checkbox"/> 対応（反映）完了</li> <li><input type="checkbox"/> 次年度も引き続き対応</li> </ul> <p>②</p> <ul style="list-style-type: none"> <li><input checked="" type="checkbox"/> 対応（反映）完了</li> <li><input type="checkbox"/> 次年度も引き続き対応</li> </ul> <p>(2) 平成30年度を取組内容・結果</p> <p>① 「上越教育大学大学改革基本構想」に基づき、改革後の教職大学院のカリキュラムを構築した。なお、修了年次に「学修成果報告書」の提出及び「学修成果発表会」での発表を求めており、2年間における実習校での実践のみならず、実践後の省察・実習校への還元を含めた「学校支援プロジェクト」全体の成果や個人の研究テーマによる探求活動の成果を具体化させることにより、「実践の理論化」を促している。また一方で、「学校支援プロジェクト」での成果が学会発表につながった事例もあった。</p> <p>② 「より具体的な内容の体系モデル」については、教職大学院案内で2年間の学びの流れをタイムテーブルにより図形化して提示した。</p> <p>(3) 今後の取組（予定） (該当なし)</p>

<p>教職大学院評価基準 (平成27年度)</p>	<p>基準3-3 教職大学院にふさわしい実習が設定され、適切な指導がなされていること。</p>
<p>学長が 取組が必要と 判断した課題</p>	<p>教職大学院の実習について、「(校長会等各方面に対する趣旨説明の機会を多く持っていることは有意義であるとして) 問題はあくまでも実習の中身・実質である」、「(実習の例は分散型と集中型が示されているが) 通年にわたり、柔軟に支援できると良い」という意見を受けたことから、これらの意見を反映した改善の取組が求められる。</p>
<p>改善策</p>	<p>平成31年度の大学院改革に伴い、専門職学位課程(教職大学院)の入学定員を拡大することへの対応も踏まえ、平成31年度以降は6月の「学校実習コンソーシアム上越」での承認後から学校実習(学校支援フィールドワーク)を開始することができるよう、実施方法の見直しを行う。このことにより、従来は9月から開始していた実習について、ほぼ通年にわたる支援ができるように改善する。</p>
<p>改善策の 取組状況</p>	<p>(1) 平成30年度の改善状況  <input checked="" type="checkbox"/> 対応(反映)完了  <input type="checkbox"/> 次年度も引き続き対応</p> <p>(2) 平成30年度の実施内容・結果  学校実習委員会において、平成31年度以降は6月の「学校実習コンソーシアム上越」での承認後から学校実習(学校支援フィールドワーク)を開始できるよう、実施方法の見直しを行い、ほぼ通年にわたり支援ができるように改善した。</p> <p>(3) 今後の取組(予定)  (該当なし)</p>

<p>教職大学院評価基準 (平成27年度)</p>	<p>基準3-5 成績評価や単位認定、修了認定が大学院の水準として適切であり、有効なものとなっていること。</p>
<p>学長が 取組が必要と 判断した課題</p>	<p>教職大学院の実習について、「(成績評価の観点について、学部卒学生と差別化するために現職教員学生に追加された項目はあるが)学部新卒学生にも、現職教員学生にはない項目を設定すべきではないか」、「(現職教員学生の評価票の評価基準に『校務の企画・運営に関して』の評価観点を追加し、差別化を図っているとの記述があるが、)これだけではなく、『即応力・臨床力・協働力』の3つの力それぞれに対して、差別化し、評価書を分けた方がよいのではないか」、「現職教員学生が学部新卒学生の現場でのメンターのような役割を果たすということであれば、現職教員学生のメンター的な役割についても記述するように明示したらどうか」という意見を受けたことから、これらの意見を反映した改善の取組が求められる。</p>
<p>改善策</p>	<p>平成31年度の大学院改組に伴い、平成30年度中に「学校支援フィールドワーク評価票」の見直しを行う。その際に、「改善が必要と認めた事項」を踏まえて改善を図る。</p>
<p>改善策の 取組状況</p>	<p>(1) 平成30年度の改善状況  <input checked="" type="checkbox"/> 対応(反映)完了  <input type="checkbox"/> 次年度も引き続き対応</p> <p>(2) 平成30年度取組内容・結果  学校実習委員会において、「学校支援フィールドワーク評価票」の見直しを行い、本学教職大学院の3つのコンセプト(即応力・臨床力・協働力)に基づく評価基準を作成するとともに、大学院1年目と2年目、ストレートと現職の評価基準の違いを明確にした。</p> <p>(3) 今後の取組(予定)  (該当なし)</p>